

安保フンサイへ人間の渦巻を!!

週刊フンサイ

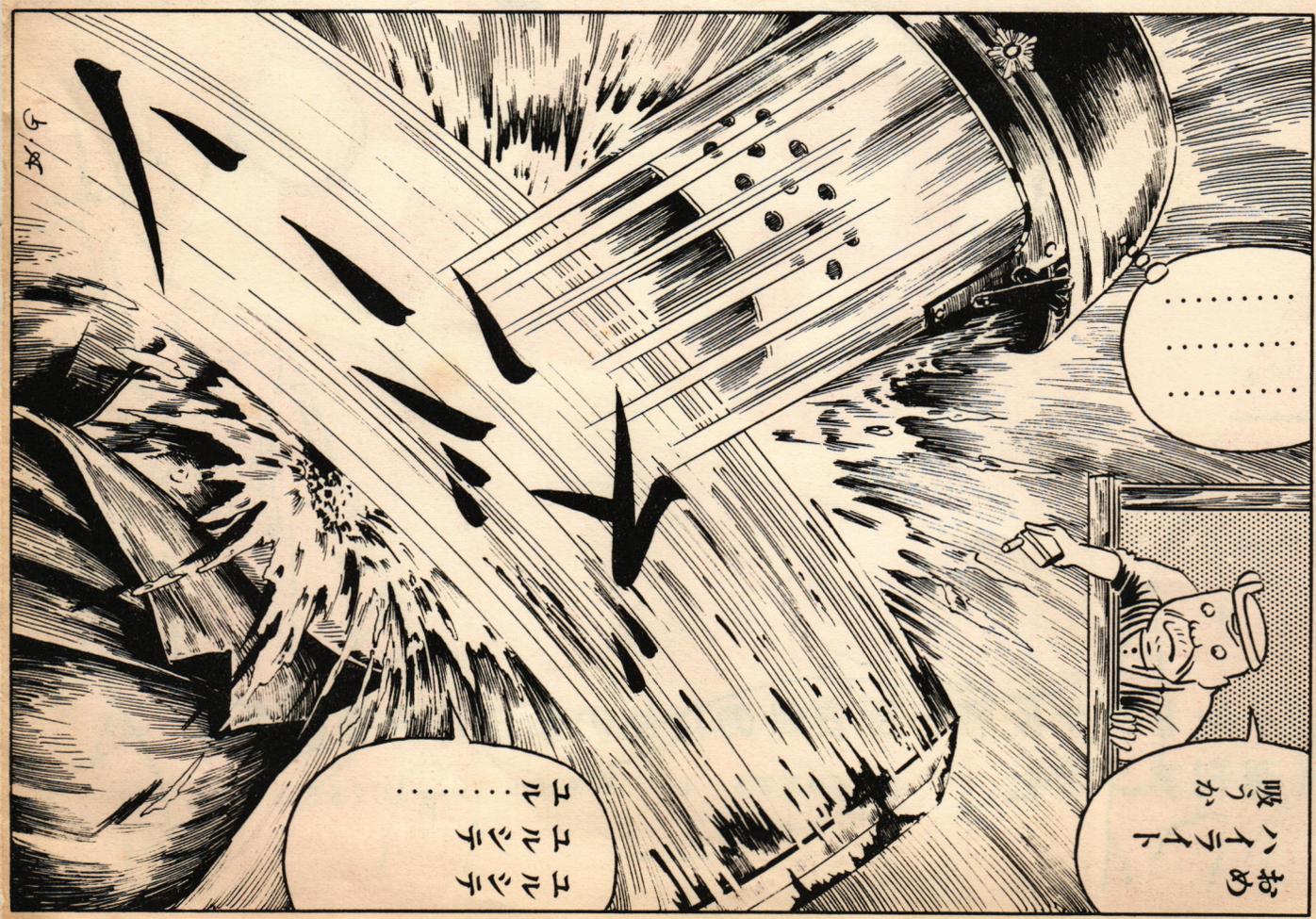
No.14



安保を私達の手に

安保をつぶせ沖縄を私達の手に日本を私達の手に

週刊フンサイ No.14



おめ
パイラント
吸うか

ユルシテ
ユルシテ
ユルシテ

5/28

みんなでてこい!!!

6.14

6月大行動

6.23

インドシナ反戦と反安保のための新6月行動委員会

週刊アソシエ社 東京・新宿区神楽坂6-44 石井ビルTEL(03)267-2471

Kiyoshi AWAZU





行動

のための新6月行動委員会

— 44 石井ヒル TEL (03) 267-2471

Kiyoshi AWAZU

みんなでてこい!!!

6.14

6月大行動

6.15
6.23

インドシナ反戦と反安保のための新6月行動委員会
週刊アソシエ社 東京・新宿区神楽坂6-44 石井ビル TEL (03) 267-2471

Kiyoshi AWAZU

日本の戦後史を振り返る。戦後史を振り返る。戦後史を振り返る。



海外派兵

日米共同声明

沖縄返還

大学法

日韓条約

エンタプライズ

出入国管理法

4次防

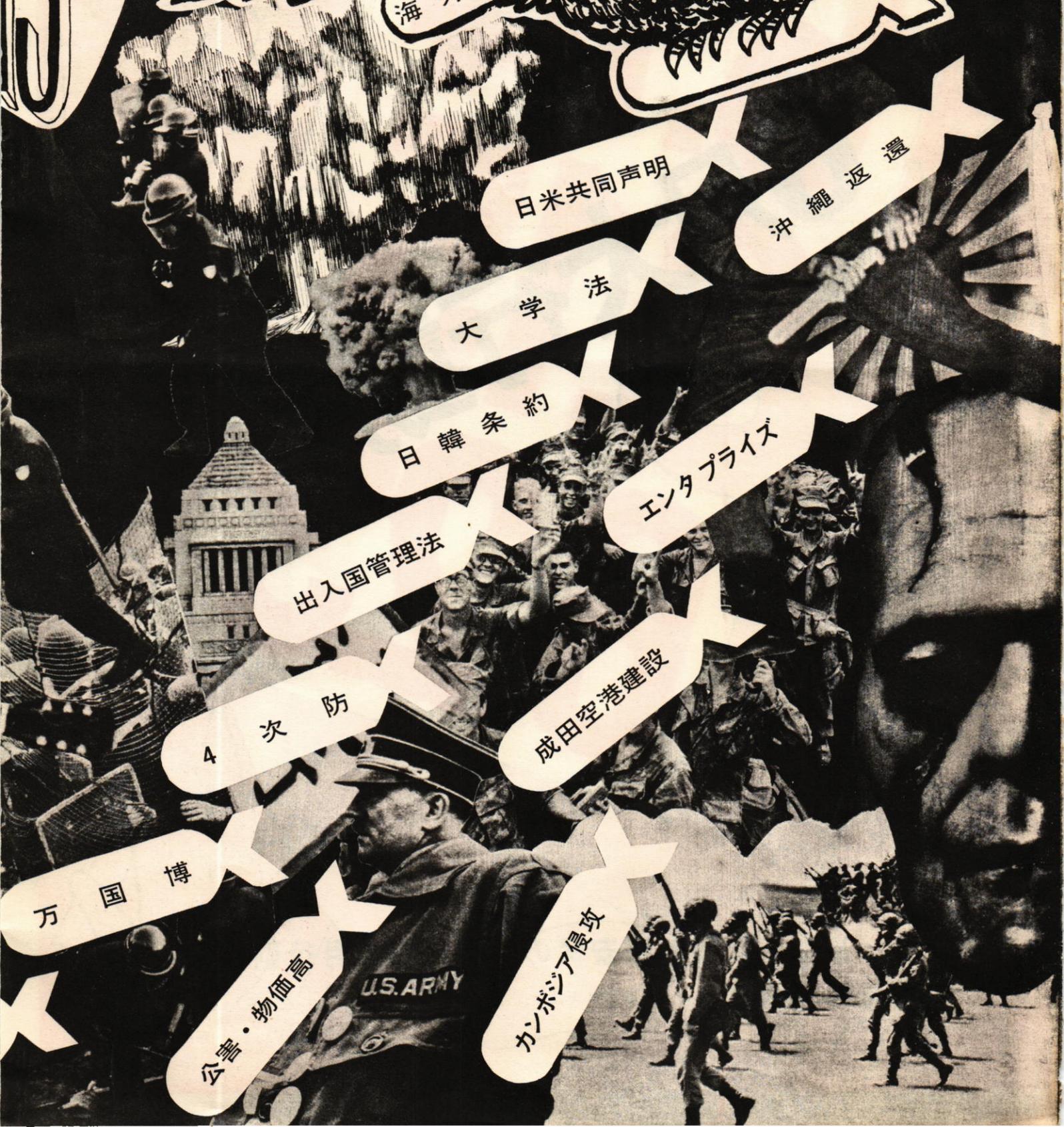
成田空港建設

万国博

公害・物価高

カンボジア侵攻

U.S. ARMY





モ……お手々つなばいにひろがつち

モ……ガツチリ腕ク・ダンス。デモシ

ン、道に寝ころんキネイリ・デモと

ハラ、カーネーションをもつて静かに金かかるな。ナン



- デモ・集会のスケジュール、知りたかったら……267 24711 番へ平連へ
- 右翼・機動隊暴力団が来て困つたら……110番へ電話してもダメ。グルだから。
- 知人・友人が逮捕されて、困つたら……591 1301
- 火災ビンで、ポリ・ボックスが燃え出したら……119してはイケマセン!
- 恋人の電話は() ()。これはじぶんが書きこめヨ。知らない。

すいのはダメ。登もつとも楯でネラある。れてもいいもの。いい。だけど、ミまらないとの声もアツイからナア。動隊にとられないくないように。これ、ホントにい



○お金は持ってた方がいい、たくさんはあるだけ、汗かくし。

○住所録、コレは持っていないコト他人に迷惑かけるのはイケマセン。

○作戦メモは覚えよう。覚えられないようじゃ、革命は遠いとマルクスはいったか?

○ゲバ棒と火災ビンは歴史的・社会的に判断せよ!

○ブラカードが少なくなつた。週刊アンボはブラカードにも、ボスターにも使えるんやで。



- 沈黙は金、と昔からいうナ。逮捕されても住所氏名はしゃべるナヨ。
- 「弁護士を呼べ。591 1301 救援センター経由で」というだけで可オリの中にイモ、コリヤ、友はいるヨ、ホイホイと。オルグの場だよ、四六時中。
- 供述書にサイン、ナツ印しちゃうにできてからナア。

右翼小児病患者の悲惨

——三島由紀夫批判——

真継伸彦

ロマン主義者という馬鹿につけるクスリはないものだろうか?

人生に至高の栄光の瞬間だとか、つまりはありえない美をもとめたがる病的な傾向の持主の眼を、どうすればさませせてやれるのだろうと考えてみれば、これはなかなかの重症であつて、病人はむろん三島由紀夫氏だけではない。

ロマン主義は私たちがとくに思春期に一樣におちいる、ハシカに似た病気なのである。思春期とは性の開花によつて、肉体にたいする愛着と嫌悪とが同時にめざめる時代だろう。肉体の変化は未熟な精神にとつて思いがけない出来事であり、精神は一時的にしろパラスをうしなう。そのときに、やはり私たちが共通にもつている自己愛が、肉体なら肉体の、美しい側面のみを偏愛するという、偽善的な、病的な傾向を生みやすいのである。病がつると、永遠の美、永遠の青春、あるいは人生の至高の栄光の瞬間といった、アホらしいものへの偏執が生じる。ロマン主義者三島由紀夫氏が思春期に強度の自己欺瞞におちいり、その時点で精神の発育がピツタリとまっしてしまつた御仁であることは、さきに紹介した「英霊の声」の「あ

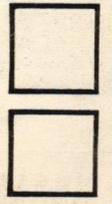
とがき」を読めば一目瞭然である。早発性痴呆患者三島由紀夫氏は神道主義者となつて精神を絶対主義的に凝結させてしまふのだが、まだ四十代のなかばという若い身空で! 氏の精神の凝結と衰弱は、「春の雪」や「奔馬」などという護教小説を読めばやはり一目瞭然である、氏を呪術信仰にみちびいたのも、この永遠の美、ないしは瞬間の栄光への病的な欲求であつて、それが天皇というカツコウの対象をみいだしたというだけの話なのだ。

個人においても民族においても宗教の成立する事情は多種多様であり、宗教とは一般に人間精神の総合的な表現なのである。宗教の優劣は、人が宗教を欲する動機の優劣が決定する。現世利益だとか永遠の美だとか、私たちの部分的な、あるいは自己幻惑的な欲求のみを満足させる宗教が、劣つた宗教なのである。反対に、私たちの現実に正しく眼をむけさせ、現実その日への、愛を生みだす宗教が優れた宗教なのである。神道とはもと現世利益を求めめるための呪術であり、人を幻惑させるものであり、劣つた宗教である。しかもおなじ多神教のなかでも、思考力や

分折力や希求力は、インドのパラモン教や古代ギリシヤの多神教にくらべて一段と劣つているのである。

反対にすぐれた宗教が一樣にもつているのは運命愛なのだ。美醜こもごもの現実をそのままに愛しようとする意志である。私たちの肉体の生病死という運動そのものは悲惨である。しかし私たちの精神は死ぬまで独自の仕事をないうるではないか。精神の仕事への正しい意志をめざめさせて支えるものがすぐれた宗教である。

私は何も学問や芸術といった高尚な仕事だけを言つていゝのではない。これは西陣の織物問屋を経営している友人から聞いたのだが、織物というみかけは単純な仕事も、実は不断の自己練磨であるという。気のゆるみが織物のたるみにそのままてしまふ。私たちに必要なのはそういう意味での、精神的な仕事なのだ。そして問題は、仕事がいかに機械化し、しかも仕事の目的が利潤に限定されている現代に、正しい仕事の意味がますますみうしなわれてきているということである。





インドシナ反戦と反安保の
週刊アンボ社

東京・新宿区神楽坂 6



大馬

大馬

大馬

瀬戸内海汽船の定期船「ぶりんす」を乗取った川藤展久氏(二一〇)は、五月一三日午前九時五二分、同船の甲板上で、警察のライフル狙撃隊員の一弾によって射殺された。川藤氏の最後の姿は、テレビ中継で「平和な茶の間」に映し出された。同氏が胸に銃弾をうけてつんのめる姿、死にかけた氏に警官がタックルをかけ、足でふんづけて後手錠をかける姿。

同日の朝日新聞夕刊は「歓声——どよめく観衆、同情——ひどいと船員、冷静——撃の警官隊」と現場

のは日本だけ」という言葉は、アメリカのようにやれ」という無気味なそのかしである。そうだから、黒人を私刑にするアメリカの白人モップの文法であるにちがいない。耳をそがれ、鼻を切られ、処刑の木に吊される黒人は人間ではない。深夜にブラック・パンサーの事務所に入り、ベットを自動小銃で蜂の巣にするアメリカの警官隊は、パンサーの黒人を人間とは寸分思っていないにちがいない。もし人間だとすれば、川藤氏に船を乗取られた船員のような反

藤氏がどんな罪を犯したにしろ、彼は法律によってのみ裁かれ、法廷が有罪とするまでは、無罪である。これらはすべて常識的なことだ。

国家はしかし川藤氏を人間とは見なかつた。警察庁のライフル隊は狩獵者として冷静に狙撃した。はじめから私刑によって殺すつもりであつた。前日の『朝日』の見出しは何と言っているか? こうである——「射殺もやむなし、大阪府警射手5人を急派」、つまりこれは計画された狩獵であつた。会

人間狩獵者をたおせ

■射殺は「正当防衛」ではない

武藤一羊



のもようを報じた。同じ新聞で会田雄次京大教授は、「見せしめとしても必要」と語つたのが引用されている。教授はいう。「今度の場合、私は射殺しかしようがないと思つていた。……人質事件で犯人を射殺しない——など手ぬるい措置をとつているのは、日本だけではなからうか。こうした事件の流行には、乱暴男に対して見せしめが必要だ」

「見せしめが必要だ!」 「射て射てノ射ち殺せ!」 会田教授のよびかけはこう響く。「手ぬるい

の勢子であつた。田教授をはじめとするモップはその重要なことは、この殺人が警官の「正当防衛」だと言われていることだ。岩壁の銃眼からスコープつきライフルで狙いうちする警官の「正当防衛」!、しかしこれが佐藤榮作氏の日本語なのだ。米国のカンボジア侵入は「正当防衛」であり、自衛のため必要」なのだ。われわれはカンボジアでベトナムでマラッカで、そして日本で「人間狩獵者」をたおさなければならぬ。

ひとりとりの叫び 100人の叫び

安保拒否百人委員会

名前どおり、メンバーは一〇〇人かどうか知らぬ。それ以上いるらしい。らしいというのは、ぼく自身、いつもクチコミで、「行動」を知るため、委員会がなんであるやら、何人くらいが同一行動をしているのか、まったく知らない。知っているのは、目的が「安保拒否」、行動が「非暴力、直接行動」、そしていつも一〇〇人ちかく集まるということだけ。

それという日に、数寄屋橋(四月二八日)、あるいは日比谷公園の噴水のそば(五月一四日)に行けば、同じ志をもつとおぼしき人たちがタムロしている。数寄屋橋公園に坐りこむ。そのときは「右翼」の大集會が、同じ場所であり、赤尾敏などが、われわれを材料に大演説をうつつ。警官の群がきて、「責任者は誰か」と聞く。「そんなものは知らん。オレは安保拒否の行動のために、ここに坐りこむんだ」と答える。メンバーはみんなそう答える。そうとしか答えようがない。彼らは狂暴にわれわれをゴボウぬきにかかると、われわれは押し出されるが、また帰って坐る。

四月二八日は国会議事堂まえ。職務質問を受けながらとにかく、二〇名ほどは国会正門まえにたどりつき、坐りこむ。排除まで一時



○フランス...
○ジグザグ...
○ダイ・イン...
○トツ...
○もい...
○花束...
○陽気...
○無届...
○センス...

○靴...ぬげや
○山靴...
○ズボン...
○デニム...
○二も...
○ある...
○上着...
○メガネ...
○ハチマキ...
○化粧...
○多い?



安保は終わったと誰がいうのか

小説Ⅱ大江健三郎

その青年保守政治家は、ヨットで遠洋航海したとき、夕ヒチ島の娼婦から、おまえはかつて見た日本人のうちもつとも美しい男だと、ほめられたことを忘れなかった。そして、あの娘が（かれは自分にかかわることならなにごとく美化したので、夕ヒチ島の札贅者もまた、当然に美しい娘でなければならなかったものの、他の乗組員の噂では、娼婦はゴーギャンの生前の面影についても語ったそうだし）もつと情報通であったなら、おまえは日本でいちばん良い作家であり、いちばん良い劇作家兼劇場重役であり、いちばん良い参議院議員であり、いちばん良い都知事候補であるといっただろうに、と懐かしんだ。

しかも男は、億万長者ですらもあつたし、保守党議員として税務署の追求には大平楽をきめこめたから、かれの畜財の未来は、なににもまして明るかつた。それでいて青年保守政治家は、最近すこしく憂鬱だつたのである。かれは陽気な時に単純であつたように、憂鬱においても単純であつた。

すなわち、ハイ・ジャック事件をきっかけに朝鮮の民衆の頭上を、日本政府と米軍とが、泥靴でかけまわつたような大騒ぎから、ひとりの青年保守政治家のヒーローが生まれたのであるが、それがまったく理不尽にも、つねに第一のヒーローでなければならぬ、この男ではなく、それまでかれが歯牙にもかけなかつた、一政務次官であることが、憂鬱の種子だつたのである。

——シンタローより、シンジローなどと誰がいうのか！こいつの顔のかわりに、おれの顔をおいてみろ、人質志願の報道写真が、どんなに悲劇的にひきしまつたことか！と、かれは、かれよりほかのヒーローをたたえている新聞を睨みつけて義憤にたえぬ唸り声を発した。こいつがうまいチャンスにありつき、このおれが人質の機会をとりがしたというのは、まったくなんたるまちがいか！

青年保守政治家の不機嫌にびくつきつつも、おそろいのブレザー・コートを着た側近が、こういつてた。

——あの政務次官は以前からこういうチャンスにそなえていたようですよ、先生！「持続する志」という本に、あの政務次官が、日韓条約の抜打ち採決の夜、腕力をふるって暴挙の成功のために活躍

したことが書いてあります。朝鮮問題ならば、なにがなんでもカラダを張る、というのが、あの政務次官の一貫した方針のもようですよ！

それを聞くと青年保守政治家は、ますます不機嫌になったが、いくぶん気の弱いところもあるお坊ちゃん育ちでもあるかれは、ひとりよくよと考えこんだ。おれには、その一貫してやりとおす、というところが欠けているからなあ、小説も本当に実のある仕事をやるまえにやめな、芝居もそうだし、政治だって、二百万票当選という花やかな出だしにみあうような実質は、なにひとつやれないままで、いまこんな具合だし……

——安保は終わったと誰がいうのか！と突然に青年保守政治家は叫んで、かれを、とらえようとすする気の滅いるもの思いを吹きとばそうとした。おれはA B Mを日本にもちこませるようアメリカに要求してやる。アメリカを日本の核防衛にまき

評論Ⅱ小田 実

一つの任務がある。どんな任務か。その任務を命じた男は言う。

「射手の任務は初発、すなわち一発で相手の抵抗力をとめることにある。威かくなどしたら、それこそ、あばれさせるだけ。」

では、どうするか。すなわち、殺す。殺せ！ 邪魔者は殺せ！

彼はつづけて言う。

「こんどの射撃は一〇〇点。いや一〇〇点という誤解をまねくので、任務を完了したと書いてくれ。」（と「サンデー毎日」の記者にむかつて彼は頼む。）

さらに、彼はつづける。つづけて言う。「ただ人間的には犯人をふびんに思うし、批判もあるだろう。」

さらに彼はつづける。つづけて言う。「標的を撃つときと人間を撃つときは、気持の上で動揺もある。だが、そうした人間的なもの、内面にあるものを克服し、あらゆる雑念をはらい、私の情をなくして引金を引けるよう、われわれは訓練している。」

人間の、ものを克服、したあとに残るものは何なのだろう。人間からそれをほら

こんで、日本から手をひけないようにしなければだめだと、新しい安保を主張して、ひとつ大花火をうちあげてやる、安保は終わったと誰がいうのか！

かれは頭が良いというよりも、むしろ頭のかたち、とくに髪型の良い男だつたから、核防衛のとらえかたの倒錯には気がつかなかつた。しかしかれは永年の花やかなヒーローとしての本能は身につけていたので、この大花火はだいたいぶだど感じとっていたのである。

なぜなら、いったん日本がアメリカの核戦略にわれとわがみをまきこんでしまつたなら、もう途中でひきかえすことはできず、この青年保守政治家のヴィジョンのまちがいが誰の眼にもあきらかになる時は、日本列島が水爆の輻射熱に炎上しているはずであつて、もう、いかなる日本人も、あの青年保守政治家は、また途中で「転進」した、という暇など、もちあわせてはいないだろうからだつた。（終）

いのけたあとに残るもの、それは人間なのか。

「命令」を受けて、「任務」(男の言う通り、これはまったく非人間的な、人間にあるまじき「命令」であり「任務」であつた)を遂行した男は言う。

「非難もあるでしょう。いろんな考え方もあるでしょう。しかし、あなたにはあなたの生き方、私の生き方があるんです」

なるほど、その通りだ。ただ、この男はあなたの生き方が彼の生き方とちがうなら、あなたを消し去るだろう。「命令」を受けさえすれば、「任務」をさすかりさえすれば、どのような「命令」であれ、「任務」であれ。

彼はつづける。「それがいやなら、わたしはやめるしかない。」もちろん、彼はやめやしない。やめる代りに、あなたをやめさせる。あなたが人間であることをやめさせる。

二人の男は、自分でそう主張するように、人間ではない。佐藤栄作、そして、ニクソンと同じように。

さて、あなたは、いや、私自身はどうか。この六月に、すべてがきまるような気がする。